

## アラカルト

周南地区鉄工協同組合・事務局長



原田芳人さん

harada yoshito

若い方の挑戦を  
応援したい

周南地区鉄工協同組合（山口県周南市、大橋一由起理事長）の参事・事務局長の原田芳人さんにお聞きした。

同組合は、昭和35年に「徳山地区鉄工協同組合」として発足、40年に労働保険事務組合として労働省認可を受けて労働保険の事務委託業務を開始した。市名変更に伴い、平成15年に現在の名称になっている。

## ●67歳で一発合格

大手化学メーカーを定年退職した原田さんが周南地区鉄工協同組合の事務局長に就任したのは平成6年のことだ。

「メーカーに勤務していた時代には、関連会社に出向して経理などの事務を担当したこともあるのですが、協同組合の業務は初めてでした。組合法について勉強の必要性を感じていた時に、山口県中央会の地区担当の方から中小企業組合士の制度があると聞きしました。この検定試験の合格を目指して勉強すれば効果があるのではないかと考えて勉強を始めたのです」。

原田さんは、こう振り返る。60歳を過ぎてからの挑戦だった。

「まさに『六十の手習い』であり、お恥ずかしい話なのですが（笑）、一念発起してがんばりました。組合士の認定条件である『実務3年』の後の合格を目指して勉強し、おかげさまで平成10年に試験を受けて67歳で合格しました」

## ●合格して業務に自信

たゆまぬ努力に敬服するが、原田さんは、周南地区鉄工協同組合の「初の組合士」としても注目された。

「当時、組合は設立から35年を迎える頃でしたが、組合員も組合士についてほとんど知らなかったようです。そこで私の合格は組合総会でも話題になり、一挙に組合士の認知度が高まりました。組合士という存在だけでなく、私の組合運営や業務活動にもさらなるご理解をいただけるようになったと、自負しています」と微笑む。

関連法や実務を網羅的に勉強することで組合事務に関する総合的な知識が付き、合格とともに自信も生まれた。

「やはり合格すると自信がつかますね。私にとって協同組合は未知の世界でしたから、当初はある意味『オッカナビックリ』の面があったのですが、組合士として自信を持って業務に携わることができるようになりました」

そう話す原田さんは傘寿を迎えたが、ますますお元気に活躍されている。

## ●若手と接すると刺激になる

全国的に建設や設備投資が順調なことから、鉄工業界も景気は回復傾向にあるようだが、資材や燃料の高騰による収益低下や少子高齢化による労働者の不足など懸念材料もある。

「楽観はできませんが、これからも『アイアンエイジ』の未来に向かって躍進していきたいと思っています。当組合には、戦争を描いた映画『出口のない海』の撮影で使用された人間魚雷『回天』のレプリカを制作したり、中国からの技術研修生の養成に尽力するなど、ユニークな活動をしている組合員も多いのです」と胸を張る。

原田さんも戦争を経験され、焼け跡から再出発された世代だ。

「60歳を過ぎて合格した私が申すのもおこがましいのですが、若い方にはぜひ受験していただきたいですね。組合士の研修会や懇親会でがんばっている若い方にお会いすると、私ももっとがんばらなくてはと思います。若さと能力のある方が自分の将来のため、ひいては組合のために合格して業務のスペシャリストとして活躍されることを応援したいですね」

組合士として、人生の大先輩として、これからも若い後進にエールを送り続けていただきたい。